

半世紀にわたる「問題」を、いま問い直す。

不登校 50年

証言プロジェクト

#03 最首悟さん

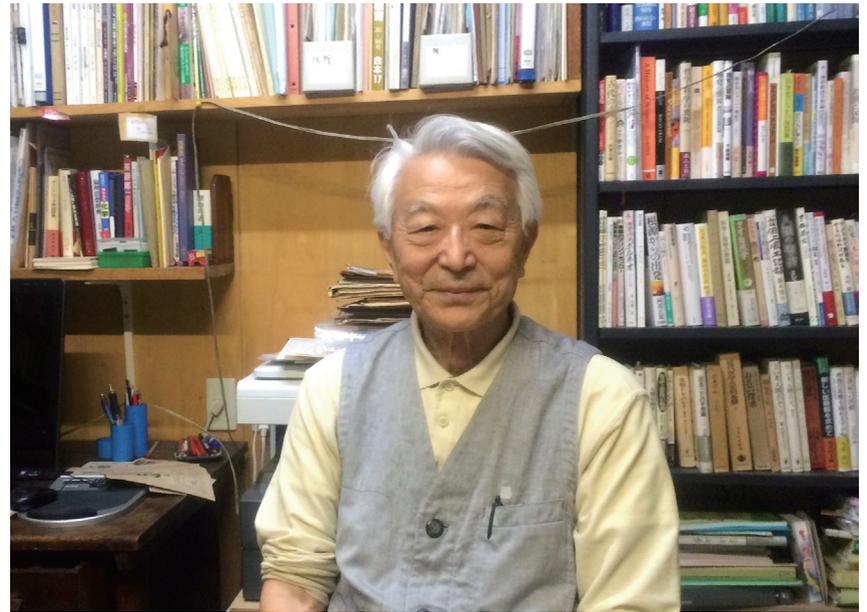
学校基本調査で「学校嫌い」の統計が開始されたのは1966年。今年はそれから50年にあたります。学校を長期欠席する子どもは、学校制度とともに常にいました。しかし、現在につながる「問題」として不登校が社会現象化してきたのは、この統計開始以降とも言えます。この50年、不登校は「問題」であり続けてきました。それは、学校、教育行政、精神科医療、家族のあり方、働き方などが、さまざまに問われてきた「問題」だったと言えます。この50年は学校に行かない子どもたちにとって受難の歴史だった一方、親の会やフリースクールなどの市民運動が立ち現れてもきました。いったい「不登校50年」の歴史は何を語るのでしょうか。不登校をめぐる、時代ごとにどんな状況があり、どのように問題とされ、どう対応されてきたのでしょうか。

不登校新聞社では、「不登校50年」を機に、証言プロジェクトを開始し、不登校経験者、親、親の会、居場所・フリースクール、医者、教員、学者、弁護士など、さまざまな関係者の生の声を集め、アーカイブにしていきます。インタビュー・寄稿は、社会的意義を考え、購読者に限定したのではなく、無料で公開します。そのため、プロジェクトは、寄付によって運営します。ぜひ、このプロジェクトへのご支援・ご協力をよろしく願います。

2016年7月15日 全国不登校新聞社

プロジェクトチーム（統括：山下耕平）

関東チーム委員：奥地主子、木村砂織、朝倉景樹、石林正男、加藤敦也、佐藤信一、須永祐慈、関川ゆう子、野村芳美、藤田岳幸、前北海、増田良枝、松島裕之、山口幸子
関西チーム委員：山下耕平、石川良子、貴戸理恵、栗田隆子、田中佑弥、山田潤

#03 最首 悟^{さん}

(さいしゆさとる)

1936年福島県生まれ。シュレー大学アドバイザー。元和光大学教授。東京大学大学院で生物学を学び、長年同大学の助手を務めた。安保闘争などの学生運動に携わり、水俣病などの公害問題に関わるなど、思想家としても有名である。また、ダウン症であり、重複障害を抱える娘の星子さんとのかかわりから、「障害児を普通学校へ全国連絡会」の運営委員(世話人)を務め、ケアをテーマとした数々のエッセイでも有名である。おもな著作に『星子が居る——言葉なく語りかける重複障害を抱える娘との二十年』(世織書房)、『生あるものは皆この海に染まり』(新曜社)、など多数。

インタビュー日時：2016年5月17日

聞き手：加藤敦也

場所：最首悟氏自宅

*インタビューには丹波博紀氏(最首塾世話人)も同席されていた。

* 最首悟氏は昭和18年(1943年)に、ぜんそくで転地先の千葉県の小湊国民学校に入学し、昭和20年3月、疎開した家族と合流、福島県の喜多方町国民学校に転校、太平洋戦争終戦を経て、千葉県の房総地方にある学校に転校している。昭和22年に国民学校令が解かれ、名称が小学校に戻るが、昭和23年に病気を理由とした長期欠席を3年間経験している。以下の語りは、当時の国民学校のようにすに関するものである。

国民学校の思い出

最首 僕は昭和18年に国民学校^{*}1年生になるんだけど、僕の記憶では、そのころは教育勅語を直立不動で聞かないきやいけない時期だった。転校した喜多方小学校(福島県)では、室内の授業がほとんどなかったですね。4月から7月までの1学期、フキを採ってた記憶しかないからね。兵隊さんのためのフキで、佃煮にする。喜多方は醤油と味噌の工場があったので、だから佃煮づくりが盛んだったのね。

加藤 教育が軍事体制で大変だったんですね。

最首 軍事体制で、子どもは少国民だから、勉強なんかしてる場合じゃないんだよな。教育勅語^{*}については、ほんとうに緊迫していた。校長や教頭、教員の緊張具合はすさまじいものがあった、それが子どもころに伝わってきた。というのは、先生が朝の朝礼か何かで教育勅語を読みちがえたら、かならずクビが飛ぶという噂があったのね。その緊張感が伝わり、教育勅語を読みあげる場面になると、ぶっ倒れちゃう子がいたんだよ。ほくもぶっ倒れたことがあって、女の先生におぶわれて帰ったり、うんこもらしちゃった日もあったね(笑)。で、へらへらしちゃう子もいてさ、それがまたけしからん、ということになるんだけどね。ろくな記憶もないけど。

喜多方小学校のことを表しているなという思い出に「石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春ににけるかも」という志貴皇子^{しきみこ}の歌がある。あとから思ったことですが、この歌は僕が通っていた喜多方小学校時代の情景そのものなんです。森の中に入ると、小岩っぽい小さい滝があって、さわらび(芽を出したば

かりのわらび)を採って、毎日の授業が終わる。「いわばしるたるみのうえのさわらびのもえいずるはるに なりにける」喜多方、5月になっても雪があつてね。

加藤 そもそも教授っていうか、普通に教育が成立してなかったのですね。

長期欠席の経験

最首 僕は国民学校で3年間遅れたので、結局9年かかった。要するに学校がおもしろくない、つまらないから行きたくなかったのだろうね。本は読みたいし、決まりきった規律に従わなくて済むこともよかった。しかも「ぜんそく」の持病があつたので苦しい。でも、季節的に苦しい時期があつたけれど、年がら年中苦しいわけじゃなかった。だから、それらを不登校と言われることもあるけど、不登校ということには入らないような気がするの。

留守番という大義名分もできた。小学校の途中、昭和24年にオヤジが死んじやうのだけれど、母親は働きに出ていたので、昭和9年生まれ姉が母親代わりになつた。

府台高校にひとりで行かなくちゃいけなかった。しかも高校は3分の1出ないとだめで、だから出席することにして何とかクリアした。

そのような感じで、ちよつとふざけていたので、不登校とは言えないと思う。ただ小学校9年間かかった、となつていただけね。

その間、友だちがまったくなくて苦痛なのかっていうと、あまり苦痛でもないですね。学年がまるきりちがつちやうから、1人も友だちがいなくなるのは当たり前でね。友だちがいる状態は、大学に行けば自然にできるだろうという思いもあつた。

教員の家庭訪問 長期欠席への周囲の目は

加藤 最首さんの学校に行かなかつた体験というのは、ご自身としては不登校に入らないというお話ですが、学校を休んでる間は、先生とか自宅に来ることはなかつたんですか。

なつた。僕は6人兄弟の2番目で、末っ子は昭和20年生まれなので、当時まだ4歳。その上に5歳の妹がいて、その2人の世話をしなきゃいけないこともあつて、誰かが家にいる必要があつたんですよ。わたしは父親の結核も感染しててね、ぜんそくとあわせて休む大義名分ができたわけ。だけど、もともとひそかに、学校に行きたくない気持ちがあつたわけね。

小学校5年生のときに3年間休んだけれど、再び行くとしたときには、国民学校の制度が終わり、小学校になつてた。そこで昭和12年生まれの弟を飛び越して、昭和14年生まれの弟といっしょのクラスに入れてもらった。でも、そのころは学校に行く必要があんまりなかつたから、その後の中学校3年間はあんまり行かなかつた。そしてそのまま千葉県市川市にある国府台こつのだい高校というところに行くのですが、友だちはもちろんいなくて、とうとう、ひとりぼっちになつちやつた。

というのは、その当時、市川というところは中学を卒業した人が、まあ大学を目指すとなると、ほとんどが都内の高校に行くのね(ずるをして)。同じ学年になつていた弟も九段高校に行つちやつたので、私は国

最首 まつたく記憶にない。僕は3月ごろになると、よくぜんそくになつたのね。というのは、新学期に学校行かなくちゃいけないとなると、ぜんそく起こした気配もあるのよ。でもそのとき、学校はどうしたかといううと、母親に聞いたこともないので記憶にない。だから、3年間休んで再び学校に行きだすときの記憶もない。少なくとも、学校の先生が訪れてくることはいっぺんもなかつたとは思ふね。

昭和20年までが喜多方小学校で、そのあと引越してして昭和21〜22年は千葉県の房総地域の興津小学校。昭和23年4月から市川市の八幡小学校に通つて、9月から3年間ぜんそくで休み始めた。5年生の2学期以降を飛ばして、6年の1学期に復帰した。結局、どこか飛ばしてしまつた期間があるんだよね。ハハハ。

だけど、学校も僕への対応どころじゃない時代だったかもしれない。まだまだ、全然秩序だつてない時代だった。とにかく飢えは一番ひどかつた時代。戦時中よりも戦後のほうが都会は飢えがひどかつたねえ。

加藤 その当時は、学校に行つてない子どももつてい

のは結構いた？

最首 それはいたでしょう。働かざるを得ない子たちや戸籍が整備されておらず、戸籍がない子とかもいたから。地方に行けば「家船^{えぶね}」があつたしね。船に乗って暮らしているジプシーみたいな子どもたち、漁師たちがいた。

おかしなのは、僕は、ぜんそくじゃないときは、あぜ道にある小さい流れで、老人趣味のタナゴ釣に凝ったりしていたこと。それから風あげに凝って、なぜか八幡小学校の校庭であげたりしていたね。

加藤 学校行ってないときにですか？

最首 うん。それで、最初のうちは、休む前のクラスのがき大将などが、休み時間になると出てきて、おめえ、いいよなあ、学校来なくてって言われてた（笑）。おかしいよね「おまえいいよなあ」って。だから「よくないよ、たまたまぜんそくが起こってないだけで」と言い訳してたと思うんだけどね。そもそも、葉もな

た。教室の中で「あんちゃん」と言われるのっておかしいじゃない。実際、弟が同じクラスにいるんだから。それをあんまり異常と感じないのが、当時の学校だった。小林先生という22歳くらいの先生になりたての人が担任だったけれど、意外と何ともないんだよね。そういう意味では不登校という概念にはどうてい入らないよね。つまり、要するに教育そのものの、教育制度がそもそも崩壊しちゃってて、まだ立て直してきてない時代だった。

戦後の学校教育 および教員のようす

加藤 当時（終戦後）の学校の先生は、厳しかったですか？

最首 もうねえ、教師としての自信がなかった感じ。片方では意欲に燃えている、新しい学校づくりを担う若手がいたんだろうけど、全般的に教師という立場は、いったい何なのかという疑問が強かつたんじゃないか

いから、ぜんそく起こすと大変だったし。

ぜんそくから解放されたのは、中3のところからだっと思うね。プレドニン^{*4}という薬が入ってきて、一気に体が軽くなった。アドレナリンじゃダメなんですよ。エフェドリンとアドレナリンじゃ全然体が解放されない。プレドニンで大学に行く気にもなった。

*** 最首氏は小学校在籍中、3年間の欠席を経て、弟と同じ学年で通学を再開した。教室では「あんちゃん」というあだ名で呼ばれ、3歳年上の最首氏をごくごく自然に受け入れていたという。そのような経験からしても、当時は長期欠席がありふれていたんだろうな、という。以下は最首氏が学校に戻ったときの教室の雰囲気に関する語りである。

戦後の教室の雰囲気

加藤 当時の教室の雰囲気ってどうでしたか。

最首 学校に戻ったとき「あんちゃん」って言われて

な。相変わらず戦前からのスパルタが混在しちゃっていた一方で、逆に民主主義に燃えちゃっている人もいた。

一般的に自信がない先生が多かったのは、ちゃんとした先生の教育を受けてないからだね。先生を養成する教育コースが、大学のなかになくなっちゃっていたんだよね。

昭和22年は旧態依然で、学校教育だけでも教師は自分の権威がなくなっちゃっていた。昭和21〜22年は、とくに男の先生が（戦争によって）いなくなっちゃっていた。女の先生が代用教員になっていて、つまり皇国教育から免れているところはあるけども、新しい教育となると、それが無い。ぼくが好きだった代用教員の女の先生は、石牟礼道子さんのような人で初恋の人。

安野光雅という挿絵画家の回想記を読むと、どうしていいかわからないので、今日は蟻の勉強をしようとして外に連れ出して一日中蟻の観察させる、そういう日が記されているけど、今から思えば、そういうのが一番いいよな（笑）。

後民主主義教育の自己肯定感やアイデンティティの問題と絡むのかを考えちゃう。

僕がアドバイザーをしている、シューレ大学の自己研究でも、結局は、基本はアイデンティティとか自己肯定の問題で、自己肯定が自分ではできなかったところから入っている。つまり基準は西欧にあって、それは明治時代以来のいろんな傾向であるけど、西欧に基準を置いて自分のあり方を見る視点が続いていた。それから孤立文化[※]としての日本の伝統に根ざしたところとの摩擦のようなもの。そこが強いために、西洋的なパーソン、アイデンティティ、人格を受けられるけど、どうしてもなじまないことに気がついちゃう。あるいは気がつかないで無意識に苦しんでいる。そういう傾向が、今でもあまり自覚化されないけど、少し現れてきている。

つまり集団化そのものの基礎、根っこ、アイデンティティそのもののあり方が、西欧とちがう。今の私の展開は、人間という変なネーミングの人だからね、つまり人間はなかなかアイデンティティそのものにとどりつかない。だから当然ながら、ひとまず集団化に

なんていうと怒られちゃった(笑)。

加藤 誰に怒られたんですか？

最首 いやいや、みんなに。それこそ日教組なんか、不登校は当然ダメ。さいわいこっちは分裂後の日教組の理科教育の分野の関わりだから、不登校問題に関わ



らずにすんだところがあるけれど。でも、そうすつと、もう近代派から眉をひそめられちゃって、造反派にされちゃうんだ。だからちゃんとしてる不登校っていうのはあるんだよ。そのことでどれだ

なるわけで、そこに近代国家がくつついたところで、1945年まで押せ押せで破壊することになった。集団化に対して、アイデンティティ、個人をかざして、戦後、進歩的文化人の啓蒙というのが始まったけど、どうもそれが根づいていない。

だから不登校というのは、ものすごく根が深くて重要な課題で、それで押しとどめようとしたって押しとどめられない。まあ、ある意味では、みんなよくぞやってくれたみたいな感じはあるわけね(笑)。やっぱり、まだいろいろちゃんとしてる。つまり逆説的にとらえると、ちゃんとしてるから不登校なんだよなって言っちゃうわけ(笑)。それをさ、ダメだダメだとか、正常に戻しましょうっていう。明治時代以来、スウェーデン体操なんかを採り入れたりする。つまり、ひとつの隊形をとって、みんなと足や手を挙げて歩くことさえてできない人たちが、スウェーデン体操とかを採り入れて、整然とした軍隊を基礎とした近代国家をつくるなんてこと自体が無理なんだよ。それに従っていく特性もあるけども、本来は自分らしさを保とうしたら、不登校をするのがちゃんとしている人なんだよ。

いろいろなことが是正されるか。本人たちは、それは苦しいんだけど、その苦しさの中身を、ある程度整理していくことによって、自分は本来まともであることが見えてくる。まあ、そもそも、自分にはアイデンティティがないこと自体まともなんだよな(笑)。アイデンティティがあるなんてのはさ、ふりをしてるだけさ。

つまり自己否定というのは、自分の存在をはっきりさせて個人になろうというのも自己否定になるわけだよ。でも、片方で自分はこうなろうと自己規定をしちゃう。それはいろんなふう中途半端な規定を採り入れているんじゃないかと思う。それを自分が受け入れたうえで自己を規定しているのかという問いと疑問を、自己否定という。

ここらへんになると不登校そのものの吟味だね。まずは毎日学校に行って、おはようございますといって先生の言うことを聞いて、わかりますかって言われたら、わかりますって答えなくちゃいけないということから……[※]

* 1 国民学校令は昭和16年(1941年)2月28日に公布された。国民学校令の第1条は「国民学校は皇国の道に則りて初等普通教育を施し、国民の基礎的錬成をもつて為すを以て目的とす」となっている。山中恒は、皇国民の錬成とはすなわち、「天皇に帰し天皇のおん為に死して悠久の大義に生きる国民を作ること」(山中恒、1986、『子どもたちの太平洋戦争―国民学校の時代』岩波新書・209・210)と指摘している。折しも国家総動員法のもと教育の目的は、「天皇絶対・国体信仰主義」という思想に基づき、戦争体制を賛美し、ゆくゆくは国家のために戦闘行為で命を犠牲にする規範意識を持った「少国民」を育成することとなった。1947年に廃止。なお、最首氏自身も講演録のなかで『天皇は神である』ことを一番信じた年齢の子であると云われます」(芹沢俊介・村瀬学・清水真砂子・最首悟・小浜逸郎、1986、『家族の現在』大和書房・127)として世代経験に言及している。

* 2 明治23年(1890年)発布。正式名称は教育二開スル勅語。山中恒のまとめによると、「戦前戦中のこの国(日本社会)の教育に関する国是であると同時に、明治天皇が天皇の臣民としての国民の生き方について、徳目を羅列して訓示したもの」(山中1986:37)である。なお、山中によると、戦局が拡大するにつれて、朝礼の時間が長くなっていき、1限目の時間にまで食い込むようになっていったという。その内容は、整列に始まり、国旗掲揚と君が代斉唱、宮城通拝と黙とう、教育勅語を読みあげるまでの儀式(天皇が写った写真である「御真影」

への敬礼に始まり、教育勅語の入った箱への敬礼など)、教育勅語の読みあげ、校長訓話など多岐にわたるものであった。朝礼の時間中は、子どもは直立不動の姿勢で教育勅語および校長訓話を聞かねばならず、尿意を催した子どもが失禁することも多かったという。

* 3 最首氏は講演録のなかで長期欠席の経験を次のように述懐している。「傷を受けたということに関係があるといえば、昭和十八年に国民学校に入って、卒業したのが新制の小学校の昭和二十七年、たしか九年半ぐらいかかったことがあげられる。悔しいことだけれども、自分の生理的年齢とはずれてしまつて、社会的年齢は昭和十四年生まれの三番目の弟と同じになつてしまつた。昭和十四年生まれというのは昭和二十一年に一年生になる子たちです。その子たちと小学校六年から一緒になつた。まあ、そのあとほとんどん遅れて大学を卒業したのが昭和四十年です。二十九か三十かという年齢です。とても十一年生まれのように生きてこなかつた。」(最首1986:128)。また、不登校新聞第22号(1999年3月15日号)にも最首氏の学校教育経験に関するライフストーリーが掲載されている。

* 4 プレドニンとは、副腎皮質ホルモン剤(ステロイド)で、炎症を抑える薬である。

* 5 最首悟、1984、『生あるものは皆この海に染まり』新曜社。星子さんは1976年生まれであり、ダウン症など重度の重複障害を抱えている。最首氏は子どもを普通学級に通わせたいという意思が強かつたため、教育委員会の要請を断つた。ただ、著書では「公教育に

おける同年齢就学の制度」が「いかに競い合わせ、いかに良質均等な、規格成型された労働力が、安定して供給されるかという資本と国家という側面の方が圧倒的な意義をもっている」(最首悟、1984、『生あるものは皆この海に染まり』新曜社・104)ことに疑義を呈しており、公教育への不信がつづられている。なお、最首氏は週1回のペーソで愛育養護学校という障がいを持った子どものための特別支援学校に娘を通わせていたという。最首氏は、創始者である津守真の考え方に共鳴を覚えたと言っていた。

* 6 最首氏は、日米安保闘争、東京大学の全共闘など、学生運動に携わった者としても有名である。インタビュ中の語りでは、学生運動もしくは公害問題に関わつた思想家たちとキーワードが頻出する。

* 7 孤立文化とは、アメリカの政治学者、サミュエル・ハンチントンがその著、『文明の衝突』において、日本文明の特徴を説明するために用いた言葉である。孤立文明とも言い、日本の場合、一社会で成立する文明であると説明されている。

* 8 つまり、最首氏は学校教育では生徒に主体性や自由がある「かのように」見せかけて、その欺瞞に生徒が気づくことによつて、自己否定が始まるという。なお、最首氏のいう自己否定は、インタビュでも語られているが、ニーチェの自己肯定に関する議論(超人に関する論考)、弁証法的否定など、思想史に連なる概念をも含む。

本プロジェクトは寄付で運営し、すべての記事が無償で公開しています。
ご寄付のほど、よろしくお願いします。

郵便振替口座：00100-6-22077
加入者名：全国不登校新聞社
一口 1000 円 / 3000 円 / 5000 円

◇本プロジェクトにおける用語の取り扱いについて

「不登校」を意味する用語は、長い年月のあいだに、「学校恐怖症 (school phobia)」「登校拒否 (school refusal)」「学校嫌ひ」「不登校」など、さまざまな用語が使われてきました。立場や人によって、その言葉の使い方や、意味するところが異なります。不登校 50 年証言プロジェクトでは、統一した用語に整理するのではなく、話し手の文脈に即して使うこととします。

不登校 50 年証言プロジェクト <http://futoko50.sblo.jp>
#03 最首悟さん
インタビュー日時：2016 年 5 月 17 日
場所：最首悟さんご自宅
聞き手・文責：加藤敦也、編集：須永祐慈
写真：加藤敦也撮影 (2p)、シューレ大学提供 (11p)
記事公開日：2016 年 9 月 14 日

編集・発行：全国不登校新聞社
© 2016 Zenkoku Futoko Shimbun sha

東京編集局（関東チーム事務局）
〒114-0021 東京都北区岸町 1-9-19
TEL:03-5963-5526 / FAX:03-5963-5527
E-mail:tokyo@futoko.org

大阪通信局（関西チーム事務局）
TEL:050-5883-0462
E-mail:osaka_c@futoko.org